

東日本大震災から10年経って（福島）

2011年3月11日（金）14:46。東日本大震災が起きてからもうすぐ10年が経とうとしている。まるで特撮映画の破壊の場面を見ているかのように震度6の揺れが建物を壊し、津波が太平洋沿岸の町一帯をのみこんだ。死者は東北3県を中心に15,899名が確認され、未だ2,525名が行方不明である。未曾有の大災害と言われながら、世界中から注目されたのが福島で起きた原子力発電所事故だった。いま一度振り返ってほしいことがある。災害によって当たり前だったことが変わってしまった。安心して暮らせたはずの土地、おいしい郷土の食べ物、人と人とのつながりはどうなったのか。それらが瞬時になくなれば、どれほどの喪失感を味わうのだろうか。その思いを被災地の外にいる私たちも忘れてはいけない。なぜなら同じ日本列島に暮らしながら、地方どうして助け合う思いがなければ、どんなに防災対策をしても復興の支えがなくなるからである。2月27日にBS朝日「日曜スクープ」で取材された福島第一原発の廃炉の様子がANN NEWSチャンネル（<https://www.youtube.com/watch?v=SfhYANsstEo>）からわかる。アンダーコントロールと前首相が述べた見地と比べてどう写るだろうか、是非視聴して頂きたい。



※原子炉内部の燃料が溶け、様々な構造物と混じりながら冷えて固まったもの
福島第一原子力発電所では2018年に初めて※デブリを写すことに成功した。



見た目とは異なりその場で計測される放射線量によってその危険度わかる。水素爆発を起した建屋を含め原子炉の内部に着手するのは時間がかかりそうだ。



電源の喪失によりパニックになった後、高熱の核燃料が溶け炉心の温度が制御できなくなった。メルトダウンした状態からデブリになって固着しているが、ロボットアームで取り出すには技術的な問題が山積みである。

インタビューを受けた東京電力の廃炉関会社の副所長は「我々の世代だけでは終わらないので、次の世代に託していかないといけない」と語る。



東日本大震災から 10 年経って（宮城）

東日本大震災による津波被害でさまざまな場所で映像が記録され残されている。2019年に本校の中高生が「トウホク留学」の企画を立て沿岸部を訪問したとき、最初に降り立ったのが仙台空港だった。仙台駅に向かう前に見つけたのが到達した津波の高さ 3.02m の表示。浮力と津波の移動力によってあらゆるものが流されたことが理解できた。

※ANN NEWS チャンネル仙台空港のラウンジの映像
(<https://www.youtube.com/watch?v=mk68bZ701s0>)

その後、防災科を持つ宮城県多賀城高校と兵庫県舞子高校の生徒交流やフィールドワークを通して、沿岸部でおきた被害と伝承されてきた史跡の価値の重さを知ることができた。岩手県との県境に位置する気仙沼市では、本校と繋がりが長い元 鹿折仮設住宅に住んでいた方々との交流をすることができた。「復興とは何だろう」その疑問を抱えて文化祭で活動報告をした。その後はコロナ禍のこともあり、地域振興のためのイベント参加や東北地方を直接訪れる企画はできなかった。しかし、地域保全やコミュニケーションの大切さ、防災への備えが大事であることを卒業した高校 3 年生が後輩たちへ残してくれた。あの震災から 10 年が経ち、「私たちができることは何だろう」という思いを持ち、東日本大震災で傷ついた方々の気持ちに寄り添う活動を続けていきたい。



※ANN NEWS チャンネル「時が止まったまま」大震災から 10 年 夫婦の決断（2021年3月8日）

<https://www.youtube.com/watch?v=PECDCEz20ZE>

震災のことを忘れてはいけない。しかし震災のことを思い出すのも辛い。この思いに立つ被災された方々は今も多い。住んでいた県内に移住した方もいるが、親戚を頼りに慣れない土地に移り住んだ人もいよう。職を探すため離れた人もいよう。しかし、大切な家族を失ったときはそこから動く気さえなくなってしまう。

宮城県塩釜市で両親と息子 2 人を亡くした伊藤さん夫婦は、震災後に授かった娘の美紗希ちゃん（7 歳）に津波で奪われた兄たちのことをどのように伝えるか迷っていた。そこに今年 2 月に震度 6 の余震が起きた。「どんなことがあっても守らなきゃ」と決意した。お母さんは自分の辛い記憶を抱えながら、津波の映像を見せた。美紗希ちゃんは「高い所に逃げた方が良さだよ」「すぐ逃げよう」と言った。長い苦しみから津波と向き合うことで止まっていた時間がゆっくりと動き出したように見えた。

皆さま、11日は本校チャペルか自宅でお祈りをお願いします。

